

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～若者に萌（きざ）す新たな意識と行動とは・・・②～

・・・3年生には最後の通心（信）になるかもしれませんね。・・・前号のつづきです。
メディアが作り出す虚像に惑わされず、若者に萌（きざ）す新たな意識と行動のまとめです。
では・・・どうぞ。

あの巨大地震が襲った、平成23年（2011年）の東日本大震災の際のボランティアは150万人。
このときも、若者が多数参加しました。

震災ボランティア意識調査（読売新聞、平成9年）によれば、彼らを衝き動かした動機は・・・

1位が・・・「役に立ちたい」 2位が・・・「いてもたってもいられない」でした。

国が危機に瀕したとき、「しらけ」も、「三無主義（無気力・無関心・無責任）」も消え失せて救援に立ち上がる。

そこに打算はない。あふれ出るのは・・・「惻隱の情」。

愛知県から神戸に駆け付けた22歳の若者は、

「いざとなれば、自分も行動を起こせるのだ。」とアンケートに回答しています。

神奈川県での18歳の女性の場合は、活動体験がきっかけで、医療ボランティアを志して看護学校に入学。

大阪の23歳女性は、復旧作業にあたる自衛隊の雄姿に接し、一生の仕事を自衛隊と決めて応募した。

このように、ボランティア活動は終わっても、そこで見つけた課題が次の扉を開いてくれる。

不可思議な青春のドラマです。

心の中にいったん火がともったなら消えはしない。

こうした体験は、就職先を決める・選ぶ基準にも反映しています。

就職情報会社ディスコの調査によれば・・・学生が決める・選ぶポイントは・・・

企業の「**社会貢献度**」なのだそうです。

たとえ規模は小さくても、公共意識の高い会社で働くことによって地域社会に貢献したい。

これが今の若者の職業観です。



アメリカの場合はもっと早い時期に似た現象が現れています。2010年度の文系学生の就職希望先人気ランキングで、Googleやアップルなどを抑えて1位に輝いたのは・・・教育格差の是正に挑む非営利活動法人「ティーチ・フォー・アメリカ」でした。

いずれにせよ、今や「社会貢献」がトレンド。

旧態依然としたままの組織では若者に見向きもされないということです。

「致知」7月号 風の便り 「当世若者気質」 中村学園大学客員教授 占部 賢志

どうでしたか？「心の中にいったん火がともったなら消えはしない。」

平安初期に新仏教天台宗を開いた最澄は・・・「一燈照隅（いっとうしょうぐう）、萬燈照国（ばんとうしょうこく）」という言葉を残しています。「最初は一隅を照らすような小さな灯火でも、その灯火が百、千、万と増えれば、国中を明るく照らすことになる」という意味で、「一人一人の置かれている環境で精一杯努力することが、組織全体にとって最も貴重である」という教えです。

この県高での高校生活で、様々な学習・体験・楽しい経験・つらい経験、思い通りにいかなかった経験、失敗、悩みも・・・積み重ねる中で・・・3年生は・・・いつか・・・「『灯すべき火』が見えてきた！見つかった！そんな県高での高校生活だった！」と振り返ってもらえればうれしいです。

そして・・・1・2年生には、そんな県高での高校生活を送って欲しいと思います。